

2018/2/3 公文裕巳学長 内視鏡医学研究振興財団より顕彰

新見公立大学・短期大学 公文裕巳学長は「上部尿路疾患に対する診断と治療の標準化を始めとする泌尿器内視鏡学の研究・発展への貢献」により、公益財団法人 内視鏡医学研究振興財団から平成 29 年度の【顕彰】を受けました。

【受賞コメント】

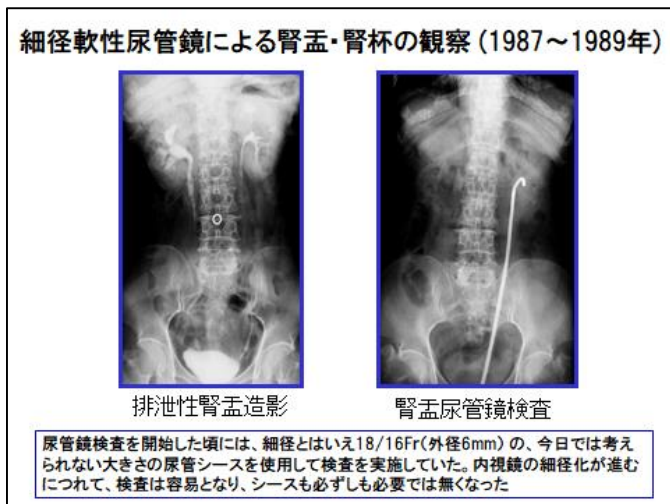
この度は、はからずも内視鏡医学研究振興財団平成 29 年度の顕彰の栄に浴し、大変感激をいたしております。財団理事長 上西 紀夫 様をはじめ関係各位の皆様にご心より御礼を申し上げます。

ご承知のように、泌尿器科学は、1877 年にドイツの Max Nitze によって開発されました膀胱鏡とともにあゆみをすすめてまいりましたが(左図参照)、その内視鏡的診断と治療の対象が、下部尿路(尿道～膀胱)から上部尿路(尿管～腎臓)へと進展するまでにおよそ100年の時間を必要と致しました。ファイバースコープの進展とともに、視野の明るさが飛躍的に向上するとともに、内視鏡の細径化が可能となりました。



丁度、私が泌尿器科医として独り立ちを始めました1980年代が泌尿器科低侵襲医療の大いなる変革期となり、経皮的に作製した腎瘻を介しての腎碎石術、細径尿管鏡による経尿道的尿管碎石術が汎用され始めました。1987年、体外衝撃波碎石術(ESWL)が保険適応となり、日本 Endourology & ESWL 学会、現在の泌尿器内視鏡学会が創設され、私もアクティブメンバーとして参加する機会を頂戴し、以後学会の発展に貢献することが出来ました。

私のオリジナルな仕事のひとつは、1987年から世界に先駆けて取り組みました「細径軟性尿管鏡による特発性腎出血の内視鏡的診断と治療」であります(下図参照)。最初に作製した私の内視鏡ビデオが、当時世界で最初の VideoJournal である“VideoUrology“の発刊を記念して、1989 年イタリアのジェノ



バを記念して、1989 年イタリアのジェノ



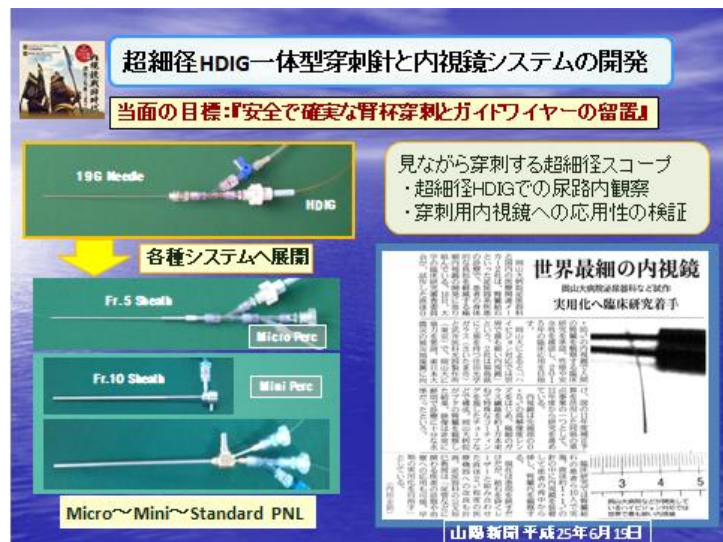
アで開催されました第1回 VideoUrology 学会で First Prize を頂戴しました。その後、100例以上の臨床症例を集積し、原因不明の本症の大半は腎静脈圧の亢進による腎乳頭部先端の微小血管の破綻であり、内視鏡的電気凝固術で容易に止血可能であることを実証し、診断と治療の標準化を達成することができました。

また、経皮的腎碎石術 PNL に関しましては、最初に実施しました1984年以来30数年間、術式の標準化と改良に取り組んで参りました。その最大の要点は、適切な腎瘻の作成であり、そのための工夫に腐心してきました(下図参照)。



2012 年からは、株式会社住田光学ガラスと武井医

科光器製作所とともに、安全で確実に見ながら腎杯を穿刺するために 0.65mm の超細径 HDIG (High-Definition Image Guide) 一体型穿刺針 (Optical Puncture Needle) の開発に取り組みました。最終的に 20G (外径 0.89mm) の穿刺用スコープを完成、引き続き、2015 年 2 月に新しいマイクロ PNL システムの実用化を達成し、3 月の停年退任を迎えることがができました。



今回、この 2 つの仕事を中心に、「上部尿路疾患に対する診断と治療の標準化をはじめとする泌尿器内視鏡の研究・発展への貢献」が評価されましたことを誇りに思うとともに、ご協力をいただきました多くの皆様に心より感謝申し上げます。有難うございました。